

山陽特殊製鋼株式会社
2024年度第1四半期決算説明会（Web説明会）
質疑応答（要旨）

開催日 2024年7月30日（火）
出席者 取締役常務執行役員 八並 敬之

Q. 2024年度上期予想の営業利益について、当社単独、O V A K O、S S M Iのそれぞれで上方修正した背景について教えてほしい。

A. 当社単独については、2023年度第4四半期での自動車減産の影響が2024年度第1四半期まで波及したこと、及び2024年度第1四半期において新たに発生した自動車の減産影響等により、上期の販売数量は当初計画比で若干減少する見通しだが、想定よりもマージンが改善しているため、予想を若干上方修正した。

O V A K Oについては、グリーン鋼材を一つの強みとした拡販が進んでいる。一例として、FNsteel社から、先般ご紹介したパートナーシップ契約とは別にスポットの発注が来るなど、販売数量の確保に寄与している。また、欧州の同業他社が苦戦している中、O V A K Oは相対的に優位なポジションにあると考えている。

S S M Iについては、高炉とは原料コスト差があることを踏まえ、高付加価値品を中心とした拡販やマージンの改善を進めており、一歩ずつではあるが収益基盤の強化が進展している。結果として、この販売数量の水準でも一定の利益を確保できている。

Q. 通期の業績予想を前回予想から据え置きとしているため、下期は下方修正となるが、これは、個別の見直しの積上げによるものか。

A. 現段階で通期の見直しを変え得る確たる要素がない、と考えている。例えば、販売数量については、前回予想時よりもその回復スピードはやや緩やかになると見ている。今後、状況を見極めていく必要がある。

Q. O V A K Oの販売数量の回復は、マーケット全体が弱い中で数量確保の努力をした結果と理解しているが、今一度解説してほしい。

A. O V A K Oは、グリーン鋼材の強みや同業他社との相対的な優位性を活かし、ポジションを一歩ずつ強化している、と考える。数量回復に関してだが、O V A K Oを子会社化して以降、収益体質の強化を促すため、意図的に人件費を含めた固定費のコントロールを強化し、過度な販売数量の拡大を抑制した。結果、高付加価値品の販売比率を高め、中級品の比率を抑えてきた。これに対し、現在は中級品の需要家から一定量グリーン鋼材を調達したいという要望が出てきており、それに応えていることが、数量回復の一因と認識している。

Q. 2024年度上期予想 対 下期予想の経常利益の変化要因における、連結子会社経常利益の増減について解説してほしい。

A. 連結子会社経常利益+50億円には、子会社配当金の消去影響+29億円が含まれる。この配当金消去影響を除いた+約20億円の内、半分程度はメキシコ素形材子会社の収益改善、残りはその他子会社の数量回復等に伴う収益改善による。メキシコ素形材子会社は、新規案件の立ち上げに伴うコスト増加が先行しているほか、4-6月のメキシコペソ安の影響で上期の収益が一過的に悪化した。下期においては、既に相応の受注を確認できており、当初想定していた収益水準への回復を織り込んでいる。

Q. 円安影響を加味してのれん償却費は増加しているが、通期予想の当期純利益は前回予想から据え置きとなっている。のれん償却費除きでの実力値は若干上昇すると見ているのか。

A. ご理解のとおり。

Q. 当社単独の販売数量について、2024年度第1四半期から第2四半期にかけて7%増の見通しだが、2024年4-6月の自動車生産は低水準だったため、サプライチェーンを踏まえるとそれほど回復しないのではないかと。産業機械向けの回復については理解できるが、第2四半期にかけてどの分野が回復すると見ているのか。

A. 当社単独の販売数量は第2四半期にかけて若干回復すると見ている。自動車向けについては2023年度第4四半期の自動車減産影響が2024年度第1四半期まで波及したことで、第1四半期が想定よりも低位となり、結果的に第2四半期予想とは段差が生じる形となっているが、自動車向けの受注は一步步回復してきている。産業機械向けについては半導体分野を中心に一定程度手応えがあり、構成改善にも寄与すると見ている。建設機械向けについても、顧客との対話の中で販売数量の底打ち感が出てきている。在庫調整からの回復や実需の伸び等、どの分野も少しずつ回復してきているという実感がある。

Q. OVAKOの中級品の拡販が進んでいる一方、スプレッドは昨年度比でマイナスだが、損益にはプラスと考えてよいか。

A. 欧州の景況感は前年同期から大きな動きはなく、ドイツを含め製造業の動きが芳しくない中、高級品の需要は悪化しているわけではないが、回復してきている状況でもない。OVAKOにおいては、固定費をコントロールした上でも生産余力があるため、グリーン鋼材である競争力などを活かし、収益に貢献する明細に絞って中級品を拡販している。

Q. FNsteel社とのパートナーシップ契約について、業績への貢献は2025年以降からと理解しているが、アップデートがあれば教えてほしい。

A. 現時点では特段のアップデートはないが、FNsteel社からスポットでの発注が来るなど、2025年からの本格的な関係強化に向けて着実に進捗している。

Q. 第1四半期から第2四半期予想の経常利益の変化について、OVAKOの減益のインパクトが過去と比較して緩やかとなっているが、変化点があれば教えてほしい。

A. 第2四半期では夏季休暇のため販売数量は減少するが、一方で固定費は減少する。例年と大きな変化はない。

Q. 当社単独の販売数量について、下期に向けて回復が続く想定としているが、サプライチェーンの在庫状況も含め、回復する手応えがあるということか。

A. 第2四半期の当社単独の販売数量については、ある程度の実感を持ちながらの見通しとしている。下期の販売数量については現時点では明確に申し上げられないが、現状の販売数量が歴史的に低い水準であることもふまえ、上期の販売数量が見通しどおりに推移すれば、下期予想についても高すぎる水準ではないと考えている。サプライチェーンの在庫状況については、分野によって濃淡はあるが、少なくとも増えている状況ではない。

Q. 第1四半期の当社単独のマージンについて、想定よりも良化したと説明があったが、販売価格の改定が想定よりも進んでいるということか。第2四半期以降のマージンの見通しについて教えてほしい。

A. 想定よりも順調なスタートとなったが、販売価格改定の最終的な目標水準は変えていない。多少時間がかかるかもしれないが、一步步丁寧交渉を進めていく。

Q. 欧州への中国材流入に伴うO V A K Oへの影響はどうか。

A. O V A K Oが主に扱う高級品分野においては、中国材の影響は限定的である。拡販を進めている中級品についても、中国材との価格競争の中で受注獲得しているものではなく、欧州の同業他社の将来的な不透明感や、O V A K Oのグリーン鋼材の価値を認めていただいていることを背景に受注が増えている。従って、中国材の影響はさほど大きくないと見ている。

以 上

本資料は、金融商品取引法上のディスクロージャー資料でなく、その情報の正確性、完全性を保証するものではありません。また、本資料に記載された将来の予測等は、説明会の時点で入手可能な情報に基づき当社が判断したものであり、不確定要素を含んでおります。従いまして、本資料のみに依拠して投資判断されますことはお控えくださいますようお願い致します。本資料利用の結果生じたいかなる損害についても、当社は一切責任を負いません。